グレイシアの使命

ルナトゥーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
グレイシアの使命

【Ｎコード】
Ｎ８５５９Ｙ

【作者名】
ルナトゥーン

【あらすじ】
グレイシアは、バトルで森の中に飛ばされてしまった。そこでであったのは、イーブイの進家系の群れだった。

グレイシアの使命

「ほら！グレイシア、さっさとバトルしにいくぞ！」

まただ。さっきやったばかりなのに。

「グレイ・・・」

私はグレイシア。私のトレーナーは、光樹と良い、とても厳しくひどい人なのだ。弱いポケモンは捨てられ、強いポケモンのみ残される。決してアニメのあいつではない。私の後ろのダイヤモンドのような模様が、１つしかないのでとってもレアという事で捕まえられた。

「ついたぞ。バトルフィールドだ。」

私はモンスターボールの中でこう聞こえた。私はポケモンバトルをまたする事になっている。もちろんくたくただ。

「タジャ、タージャ！」

相手はツタージャ。私には効果は抜群だ。光樹は何を考えいるんだろう。

「ふぶ・・・」

「リーフストーム！」

光樹が指示を言い終わる前に、相手のトレーナーが指示を出した。

直撃だ！もちろん効果は抜群！

「グレイー！！」

私は悲鳴を上げた。飛ばされて、窓を突き破り、外にある森に落ちてしまった。私は、微かにこう聞こえた。

「ゴメン！今から探しにいきましょう！」

なんて優しい女トレーナーだ。

「必要ない。」

「えっ・・・」

「あんな弱いグレイシアは使えない。放っておけ。」

「最っ低！」

もう聞きたくない。私は目を閉じて気絶し、落ちていった。

しばらくたったら、一匹のグレイシアが来た。おでこに、ダイヤモンドみたいな模様が着いていた。なぜ気絶をしているのに、知っているかは聞かないでほしい。

「ダイヤモンドが1つ！アルセウス様から伝えられたグレイシアではないか。」

アルセウス様？あの、世界をつくったと言われる紙と呼ばれしポケモンの事か？

「アイシースカーフ！」

え？

そのグレイシアは、たちまち人間のようになった。擬人化、というやつかな。グレイシアの耳と、王冠みたいなやつと、王冠みたいなものから垂れ下がってる
やつと、尻尾が着いている。そのグレイシアは、私を抱き上げ、森の奥へと進んでいった。

「うーん・・・」

気がついたら、ベッドの上にねていて、ナースの帽子をかぶった三つ編みのグレイシアの擬人化がいた。

「うひゃあ！」

起き上がったら、私の手が、人間の手になっていた。近くの小さな水たまりを見たら、私は水色の長いくるくるの髪の毛の擬人化になっていた。

「どう・・・して・・・？」

それが、私の不思議なお話の始まりだった。

グレイシアの使命（後書き）

ちょっと長かったですか？気分によって変わるので、ごめんなさい。

グレイシアの使命？（前書き）

あ、やべタイトル間違えた

グレイシアの使命？

「え・・・？」

私はどうなったんだ？
手を触ってみた。
冷たい。
私の看病をしてくれた擬人化が言った。

「大丈夫ですか？私はルミ。この群れのナースです。」

その女の子は優しい笑顔を浮かべた。私の緊張感は少しだけほぐれた。

「ここはどこ？」

「ここは群れの『看護の洞窟』ですよ。怪我をしたグレイシア達はみんなここに来ます。」

すると、急に男の子の擬人化が走って入ってきた。銀色のくるくるした髪で、サファイアのように深い青の目だった。その子は小さな王冠をかぶっていた。前みたグレイシアよりは小さい王冠だ。ルミはお辞儀をした。

「こんばんは、ライ様。どうなされました？」

ライ様？

「うっすルミ！敬語は辞めろって言ったじゃん！」

「ライ様はリーダー候補なので敬語を使わせてもらっています。あと、私は誰にも敬語ですので。ところで、用件は？」

「ミーティング始まるぞ。」

「分かりました。すぐに向かいますのでその子を連れて行って下さい。あと、その子足を怪我したので抱えてあげて下さいね。」

命令口調じゃん．．．そういえば足が痛い。

「ふーん．．．結構かわいいな。」

え？私が？

「ま、いいか。おいで。」

彼は私の手を取って私をおんぶした。

「きゃあ！」

「緊張しなくて良いんだぞ？」

「重くない？」

「平気。軽いぜ！」

ライは私をおんぶしながら走っていった。

グレイシアの使命？（後書き）

あー何だろ．．．字数バラバラだ。

グレイシアの使命？（前書き）

はあ．．．。「気分によって浮き沈み」ってやつだな。字数が違いすぎる。

グレイシアの使命？

変なところに着いた。おっきな岩が真ん中にあって、、イーブイ、サンダース、ブースター、シャワーズ、エーフィー、ブラッキー、リーフィア、そしてグレイシアの群れがいた。

「静かに！」

あ。あの時のグレイシア。でも、今はポケモンの姿だった。岩のてっぺんで、他の進家系のリーダー達、そしてライ意外のリーダ候補と一緒にいた。

「ライ、さっさと上がってこい！」

「ごめんグレイクイーン！今行くね。」

ライは私をおろして、言った。

「アイシースカーフって言ってみて。」

ライがグレイシアの姿に戻った。

「えっと．．．アイシースカーフ？」

目の前が一瞬真っ暗になったと思うと、私はグレイシアになっていた。

「いい子♪」

ライが私をなでた。

「んじゃ、言ってくるね。」

「いってらっしゃい。」

こ、これって・・・いやいやいやいやち、ちがうもん！

私は他のグレイシアのところに向かおうとすると、グレイクイーン（？）に呼ばれた。

「お前も上がってこい。」

え。私は岩を見上げた。た、高い・・・

グレイクイーンは微かに笑った。

私を試しているのか。

私はよじ上ってみた。

うまくいった。

「今日は、このグレイシアを群れに入れても良いかの相談だ。」

ざわざわ

みんな騒ぎ始めた。

「考え直すべきだ、グレイクイーン。そんなに事はうまく行かない

ぞ。」

ブラッキーのクイーンが言った。

「そんなに心配しなくても良いはずだぜ！後ろ向きすぎるぞ、ブラッククイーン！」

サンダースだ。

「サンダーキング、いつもそうだから戦で知恵で負けるのよ？」

「エーフィークイーン、それは言い過ぎだ！」

「まあまあ、エーフィークイーンもシャワーキングも落ち着いてよお～」

「リーフクイーンはマイペースすぎる。」

「ブースターキングもじゃねーか。」

ちっちゃいイーブイ？かわいい！

「イーブキングはかわいいな～」

リーフクイーンが言った。

「やめろ！アルセウス様から天罰が下るぞ！」

みんな静かになった。

「とりあえず、害はないと思うわぁ。」

「俺も。」

「私も。」

「俺も！」

「私も・・・・」

「俺様も！」

「俺も。」

「俺も～」

それが終わった後、ミーティングが終わり、私は他のグレイシア達とキャンプに戻っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8559y/

グレイシアの使命

2012年1月13日19時58分発行